

# オートクチュール仕立ての舞台衣裳におけるパターンと縫製について — ニナ・リッチのベルベットのイヴニングドレス —

吉野 真由子・千葉 悦子

## Pattern and Sewing of a Haute Couture Dress for a Stage Costume

— A study of a velvet Nina Ricci evening dress —

Mayuko Yoshino · Etsuko Chiba

### Abstract

The purpose of this study was to clarify the pattern and construction of a Nina Ricci evening dress in the Bunka Gakuen Costume Museum, once worn by Fubuki Koshiji at a recital in 1979.

It appears the dress was imagined and constructed as a gorgeous rose on the black velvet body, because the red satin crepe, seen on the face of the dress, was utilized on the inside of the bodice as well as the foundation supporting the dress.

The pattern of the bodice, cut at the high-waist position, was developed in a near circle pattern with joined tucks to construct a three-dimensional rose-like shape.

As for the sewing method which took stage costumes into consideration, we were able to clarify various techniques such as the following: the use of two layers on the inside of the bodice foundation as well as a wire fitted inside the train's seam to keep the train from becoming disarranged when moving about on stage.

**Key Words** : オートクチュール (haute couture) / 舞台衣裳 (stage costume) / パターン (pattern) / 縫製 (sewing) / ニナ・リッチ (Nina Ricci)

## 1. 緒言

文化学園服飾博物館は、服飾専門の日本有数の博物館で、世界各地にわたる服飾資料約20,000点を所蔵している。その中には、1951年に宝塚を退団し、女優として主にミュージカルで活躍した他、シャンソン歌手としても有名な越路吹雪が舞台やコンサートで着用していた衣裳も所蔵されている。そのうちの4着は、平成25年4月12日～6月8日まで「ヨーロッパ・モード展」で特集として展示されていた。

越路吹雪が舞台やコンサート等で着用していた衣裳は、ニナ・リッチやイヴ・サンローラン、ソニアリキエル等のバリの高級メゾンに、本人が直接訪れて注文し製作されたオートクチュール仕立てのドレスである。これらの衣裳は、当時のオートクチュール仕立ての縫製方法について知ることのできる貴重な作品であ

るが、服装造形学的観点からの詳細な解説は行われていない。

本研究では、越路吹雪が1979年9月の日生劇場におけるロングリサイタルで着用したニナ・リッチのメゾンで製作されたベルベットのイヴニングドレスを研究対象として取り上げ、このイヴニングドレスのパターン採取とレプリカドレスの製作を通してオートクチュール仕立ての縫製方法と舞台衣裳として工夫されている特徴について明らかにすることを目的とした。

## 2. オリジナルドレスについて

本研究で取り上げた作品は、文化学園服飾博物館所蔵の越路吹雪が1979年9月の日生劇場におけるロングリサイタルで着用したニナ・リッチのメゾンで製作されたベルベットのイヴニングドレスである(図1)。以下、このイヴニングドレスをオリジナルドレスとする。



図1 オリジナルドレス 1979年 越路吹雪着用 文化学園服飾博物館所蔵

このオリジナルドレスは、ロングリサイタルという長期間で着用することを考慮していたのか同じデザインのドレスが2着製作されており、文化学園服飾博物館と早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に1着ずつ所蔵されている作品である。

上質の素材と熟練した技術で、完璧にオリジナルなモードを生み出している高級メゾンのニナ・リッチの作品の特徴は、高度な技術に裏打ちされた優雅でクラシックな作風で、モデルの体に布地を直接巻きつけて製作する立体的な裁断が有名であった<sup>注1, 2)</sup>。

### 3. オリジナルドレスの調査とレプリカドレスの製作

#### 3-1 越路吹雪のサイズに合わせたボディの制作

オリジナルドレスのシルエットの観察及びレプリカドレスの製作には、越路吹雪がオリジナルドレスを着用していた当時（1979年）のサイズに近いボディが必要であると考え、着用当時のサイズに近い補正ボディを制作することにした。

文化学園服飾博物館が所有している記録に、ドレスを着用していた当時のドレスのサイズとして、バスト87cm、ウエスト78cmと記載されていた。この数値をもとに、文化型ボディ9号（バスト86.5cm、ウエスト63.5cm、ヒップ91.0cm、背丈38.6cm）を用いて、オリジナルドレスを無理なく着装させることができる状態にボディの補正を行った。

#### 3-2 ドレスの形状について

3-1で制作した補正ボディにオリジナルドレスを着装させ、ドレス全体のシルエット及び構造線を観察するとともに記録用の写真撮影を行った。

オリジナルドレスのシルエットは、ハイウエスト位置で切り替えられているエンパイア・スタイルで、直線的なシルエットのスカートの裾にトレーンがあることでドレスの格調の高さを示しており、背の高い越路吹雪に向いているシルエットであったと思われる。

ハイウエスト切り替え位置から上の胸部は、黒のベルベットと光沢のある真紅の素材が組み合わさって花のように見える立体的な構造になっている。この胸部

表1 レプリカドレス製作における使用素材

	使用部位		素材名	色	組成	
	ドレス本体	表地		レーヨンベルベット	黒	地組成
パイル糸						レーヨン 100%
裏地		身頃上部	サテックレープ	真紅	絹 100%	
		スカート部分	サテックレープ	黒	絹 100%	
裏打ち布		タフタ	赤	ポリエステル 100%		
ファンデーション	表地		サテックレープ	真紅	絹 100%	
	裏打ち布		タフタ	赤	ポリエステル 100%	

の華やかな花のように見える部分と、前身頃中央に真紅のバラの造花が留め付けられていることからこのオリジナルドレスは、バラの花をイメージして製作されていたのではないかと考えられる。

### 3-3 使用素材の選定

レプリカドレスの製作を行うため、オリジナルドレスに用いられている使用素材について調査を行ったが、当時の記録には記載されていなかった。そこで、オリジナルドレスに用いられていた素材（表地、裏地、副資材等）については、目視と手による触感及び素材の厚さを計測し判断することにした（表1）。

オリジナルドレスの調査結果からレプリカドレスの製作に用いる素材は、現在市販されている素材の中から、レプリカドレス本体の表地に黒のレーヨンベルベット、ドレス本体の裏地に黒のサテックレープ、ハイウエスト切り替え位置から上の胸部の裏地に真紅のサテックレープを使用する素材として選定した。

手による触感の調査から、表地と裏地の間に一枚の布地の存在が確認できた。この布地は、形状を保持するために用いられていたのではないかと考え、形状を保持するという目的と触感による調査結果から張りのある素材のタフタを用いることにした。以下、この布地を裏打ち布とする。

オリジナルドレスのファンデーションに用いられていた素材とドレス本体の胸部の裏地に用いられている素材が同じだったため、レプリカドレスのファンデーションに使用する素材は、胸部の裏地に使用する素材と同じ真紅のサテックレープを用いることにした。

オリジナルドレスのファンデーションの裏面には、表地とは異なる別の素材が裏打ちされていたことからファンデーションとしての機能を考慮していたと考

え、ドレス本体の胸部の裏打ち布として使用するタフタをファンデーションの裏打ち布としても用いることにした。

### 3-4 パターン採取

オリジナルドレスを平らな状態に置き、ドレスを傷めないように配慮してレプリカドレス製作に必要なと思われる各部位についてメジャーと竹尺を用いて計測を行った（図2）。シルエットの観察と各部位の計測結果は、図3に示す。



図2 オリジナルドレスの計測方法

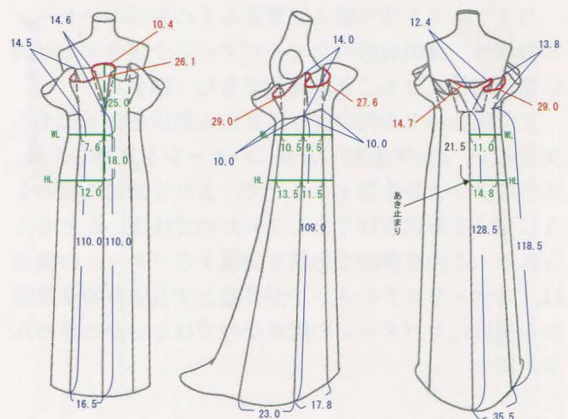


図3 オリジナルドレスの計測結果

オリジナルドレスのシルエットの観察結果と各部位の計測結果をもとにレプリカドレスのトワル製作を行い、オリジナルドレスとの整合性を確認した(図4)。

整合性を確認したパターン(図5-1, 2)を用いて、レプリカドレスの製作を行うことにした。



図4 レプリカドレスのトワル製作

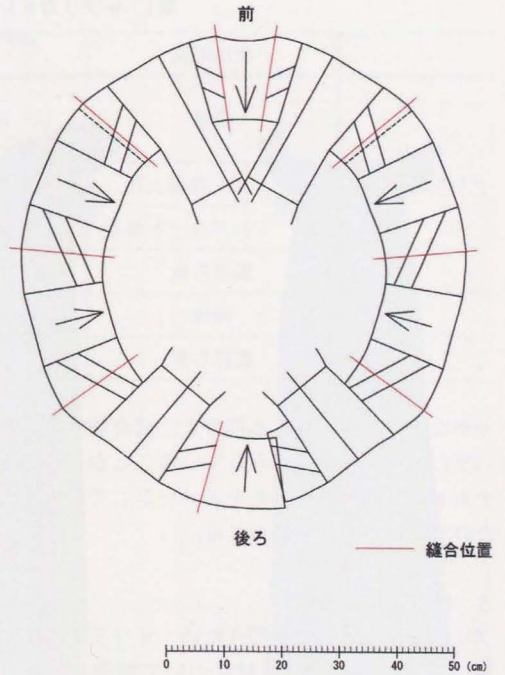


図6 身頃上部のパターン接合図

### 3-4-1 ファンデーションのパターン

ファンデーションのパターンの構成は、前、前脇、後ろ、後ろ脇の計8パーツで構成されていた。

### 3-4-2 ドレス本体のパターン

ドレス本体のパターンの構成は、前、前脇、後ろ、後ろ脇、ハイウエスト切り替え位置から上の胸部の計14パーツで構成されていた。

ハイウエスト切り替え位置から上の胸部のパターンの形状は、身頃胸部の全てのパターンを接合すると円に近い形状になることが確認できた(図6)。

立体的なバラの花のように見える形状を作り出す工夫として、フレアを出すようにパターンを展開した後、さらにタック分を加えることで、より立体的な花のように見える形状を作り出していたのではないかと考えられる。この立体的な形状を表現するパターンの構成は、ニナ・リッチのメゾンが得意とする立体的な裁断から得られたパターンの構成なのではないかと思われる。

### 3-5 レプリカドレスの縫製

#### 3-5-1 ファンデーションの製作

オリジナルドレスに取り付けられていたファンデーションの調査結果をもとに、レプリカドレス用のファンデーションを製作した(図7, 8)。

ファンデーションに使用されている表地の素材が、ドレス本体のハイウエスト切り替え位置から上の胸部の裏地に使用されている素材と同様であったことから、このファンデーションは本来の下着としての働きに加え、ドレスの一部としても使用されていたのではないかと考えられる。

オリジナルドレスのファンデーションには、各縫い



図7 ファンデーション完成図

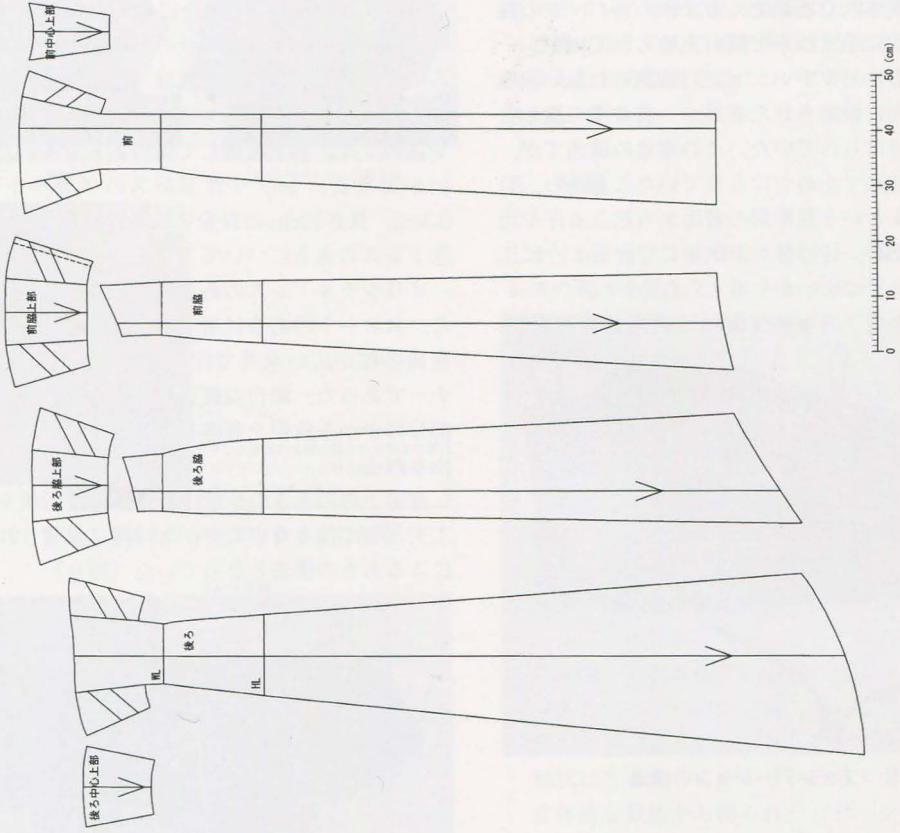
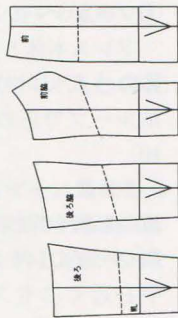


図5-2 ドレス本体パターン



----- ドレス本体との接合位置

図5-1 ファンデーションパターン

目位置にドレス本体をしっかり支えるためのボーンが止めつけられていた。このボーンは、全て表地のバイアス方向に裁断された布地でくるまれ、各パーツの縫い目線の縫い代に手まつりで縫い止められていた。

また、通常のファンデーションには見られない表地のバイアス方向に裁断された布地が、前身頃の胸もとの裏面に取り付けられていた。この布地の胸当てが、手縫いという方法で止めつけられていたことから、ロングリサイクルという長期間の着用から起こる汗や汚れに対応するため、付け替えが簡単にできるように工夫されていたのではないかと考えられる。



図8 ファンデーションの構造

### 3-5-2 ドレス本体の製作

貴重な資料であるオリジナルドレスは、解体して内部の構造を観ることが出来ないため、表側から観ることの出来ない縫い代等の箇所については手による触感で判断することにした。レプリカドレスの製作は、『文化女子大学講座 服装造形学 技術編Ⅲ〔フォーマル編〕』を参考にした<sup>注3)</sup>。

レプリカドレスの製作を通して確認できた縫製方法の特徴は、下記に示す通りである。

#### ①ハイウエスト切り替え位置から上の胸部について

ハイウエスト切り替え位置から上の胸部の立体的な花のように見える形状部分に、張りのある素材が裏打ち布として用いられていた。フレアとタックを組み合わせた立体的な形状の表現とこの形状を保持するために欠かすことのできない縫製方法だったのではないかと考え、レプリカドレスの製作では張りのある素材のタフタを裏打ち布として用いることにした。

#### ②スカートのトレーンについて

手による触感で縫い代の幅等を調査した結果、スカートの裾の縫い代部分に約太さ0.3cm、長さ12cmの細長い針金のような形状のものが止めつけられていることが確認できた。これは、越路吹雪が舞台上で動くことから生じる後ろスカートの裾の乱れを防ぎ、ドレスのシルエットを美しく保つ工夫であったのではないかと考え、レプリカドレスのスカート裾に太さ0.3cm、長さ12cmの針金を取り付けることにした。

#### ③ドレスのあきについて

オリジナルドレスのあきは、後ろ中心に作られていた。スカートのあきに用いられていたファスナーは、務歯の幅が広い金具で作られているスライドファスナーであった。舞台衣裳としての着脱におけるあきの部分にかかる負担を考慮した工夫なのではないかと考えられる。

身頃上部のあきの位置は、立体的な形状を崩さない工夫として後ろ身頃のタックの奥に設定され、ホックによるあきの構造となっていた(図9)。



図9 身頃上部のあきの構造

#### ④ファンデーションとの接合について

ドレス本体とファンデーションの接合は、ドレス本体のハイウエスト切り替え位置とファンデーションを糸ループで止めるという方法で接合されていた(図10)。

さらに、ドレス本体の立体的な花のように見える胸部の形状を保持するため、ファンデーションの上部に糸ループで14か所固定され、ファンデーションの後ろ中心近くにもスナップで止めつけられていた(図11)。この糸ループの位置は、オリジナルドレスの計測値及びボディ装着時の胸部の形状をもとに確定した。



図10 ドレス本体とファンデーションの接合

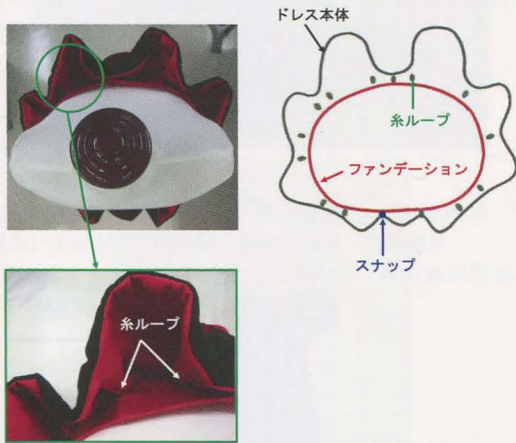


図11 ドレス本体の胸部とファンデーションの止めつけ

#### 4. オリジナルドレスとレプリカドレスとの比較

完成したレプリカドレスを補正ボディに装着させ(図12)、シルエット及びデザインの特徴である胸部の立体的な形状についてオリジナルドレスと比較検討を行った。

オリジナルドレスとレプリカドレスを比較した結果、レプリカドレスは立体的な花のようにみえる胸部をはじめとして、全体のシルエットなどオリジナルド

レスにほぼ近い形状に製作することができたと言える。

レプリカドレスの製作を通して、オリジナルドレスのデザインの特徴である胸部の立体的な形状のパターンの構成や、この形状を保持するための裏打ち布を使用するなどの縫製方法について明らかにすることができた。

#### 5. 結語

オリジナルドレスからのパターン採取とレプリカドレスの製作を通して、オートクチュール仕立ての縫製方法と舞台衣裳として工夫されていた特徴については、下記に示す通りである。

- ①オートクチュール仕立ての縫製方法について
  - ・本研究で取り上げたドレスのデザインの特徴は、背の高い越路吹雪に似合うエンパイア・スタイルで、ドレス本体の表地の黒と胸部の裏地及びファンデーションの表地に用いられていた真紅の色の組み合わせや、胸部の立体的な形状及びバラの造花が付けられていたことなどから、ドレスを華やかなバラの花に見立てて表現していることである。
  - ・立体的な形状を構成している胸部のパターンは、フレアを出すための展開後、さらにタック分が加えられており、胸部の全パターンを接合すると円に近い形状になった。ニナ・リッチのメゾンが得意とする立体的な裁断から得られたパターンの構成であることが確認できた。
  - ・張りのある素材がオリジナルドレスの胸部の裏打ち布として用いられていたのは、胸部の立体的な形状の表現とこの形状を保持するために必要な縫製方法である。
  - ・スカートは、トレーンのあるスカートにすることでドレスの格調の高さを示している。
- ②舞台衣裳として工夫されていた特徴について
  - ・ファンデーションの前身頃の裏面に取り外し可能な状態で取り付けられていた胸当ては、ロングリサイクルという長期間の着用で起こる汚れ等に対応するための工夫である。
  - ・トレーンの裾の縫い代に、約太さ0.3cm、長さ12cmの針金のようなものが付けられていたのは、舞台で動くことから起こる裾の乱れを防ぎ、シルエットを美しく保つための工夫である。
  - ・スカートのあきに務歯の幅が広い金具のファスナーが用いられていたのは、ロングリサイクルという長

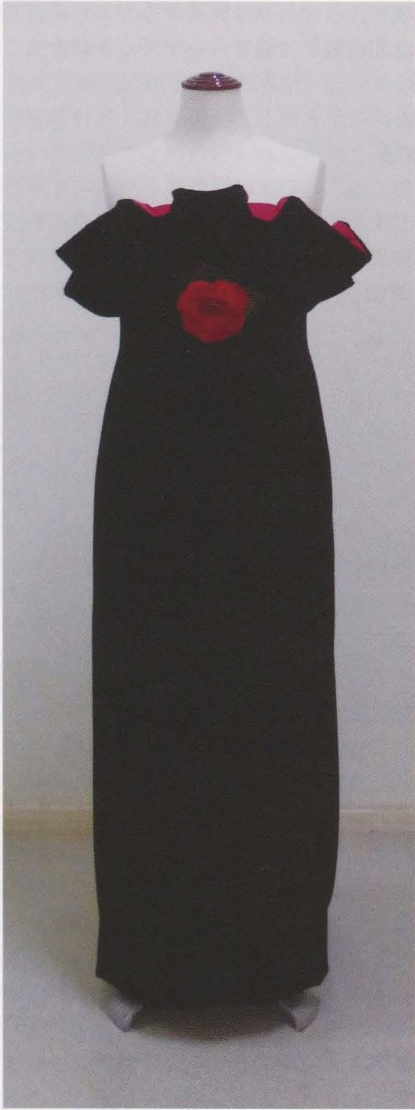


図12 レプリカドレス完成図



期間着用するドレスの着脱に対応するための工夫である。

本研究で取り上げたオリジナルドレスには、オートクチュール仕立ての繊細な縫製方法の中に舞台衣裳としての様々な工夫が加えられていることが確認できた。今回、明らかにすることができたオートクチュール仕立ての縫製方法や舞台衣裳における様々な工夫等については、学生の課題製作における指導に活用していきたい。

今後も、文化学園服飾博物館に所蔵されている越路吹雪のオートクチュール仕立ての舞台衣裳のパターンや縫製方法及び構造についての研究を進めていきたいと考えている。

## 謝辞

本研究におけるオリジナルドレスの資料調査に多大なご協力をいただきました文化学園服飾博物館に謝意を表します。

## 注

- 注1) ファッション辞典 文化出版局 p241, 275, 648, 1999年  
注2) 新田中千代服飾事典 同文書院 p674, 1991年  
注3) 文化女子大学講座 服装造形学 技術編Ⅲ  
〔フォーマル編〕文化女子大学 教科書出版部  
2008年